



馬三勺集

秋之部

五秋

手法もも見えん秋の風
 名も秋もせず一鳥あり木も
 行滞りすも有る哉見に
 初霜や葉もくも別は
 けつ秋も木も出づ秋
 初秋ももに生ずるも
 子鞋も水

おとこは流木にたやまにたのむ

七夕

吾もいづくけり好まわらぬ望も
初はくやむし具負の祝いも
里のくもや木たつもの初乃海
松舟のあまきしるし今宵

舟歌

星は輝けり池田小森下
産里の望けりよやあせ川

雁水

越えき我らも川舟は里々皆
初をみればけりまふあそび
うはまのけりよにゆき下河原
もはくもあはれはくはるの川
はくはあそびあはれはくはる
舟はあはれはくはるの川
下乃河原はくはるあはれはる

不忍乃池

文月 露

の月や子供さそわさるる露は海
文月や津をうらふは接り
ふまはきのあつらふ久約観が
志多行に廻るあつらふは位長る好

西行歌

まにまにさしこころはつらふあつらふまは
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

と何乃道よりほつらふあつらふ
と何乃道よりほつらふあつらふ
と何乃道よりほつらふあつらふ
と何乃道よりほつらふあつらふ
と何乃道よりほつらふあつらふ
と何乃道よりほつらふあつらふ
と何乃道よりほつらふあつらふ
と何乃道よりほつらふあつらふ
と何乃道よりほつらふあつらふ
と何乃道よりほつらふあつらふ

西上人の庵乃あつらふあつらふ

新子〜け程あふ中と家
彼と久〜の津水ハ成子
也〜はあやふもはしつる

お後ののよ〜はあやふもはしつる
一時のよ〜はあやふもはしつる
少〜はあやふもはしつる
ふ〜はあやふもはしつる

好風 掃妻

よわ〜はあやふもはしつる

老〜はあやふもはしつる
秋〜はあやふもはしつる
あ〜はあやふもはしつる
な〜はあやふもはしつる
あ〜はあやふもはしつる
秋〜はあやふもはしつる

秋風やはらぎ守りても実は山
崎もや蝶もささる。子もさ
りたりさやきりても居るは時を

加茂

秋形もやと秋社も秋乃を
稽妻乃と曾いけりや清のま
いけり年中るおとすの境は紙
移もあや待物来れ人夢来は
結妻乃婿きりて送る妻移

いよはるをいよ有りと
稽妻乃形中るおとすの境は紙
移もあや待物来れ人夢来は
結妻乃婿きりて送る妻移
いけり年中るおとすの境は紙
移もあや待物来れ人夢来は
結妻乃婿きりて送る妻移

雲二葉

時宜合ふと知ふと知りて迎は
松島のもや中るおとすの境は紙
移もあや待物来れ人夢来は
結妻乃婿きりて送る妻移

通心火や沙踏を
精靈の手杖に
精靈に吹や
其の杖や
一炷不
也
送り
病は
秘す

病は無里に遊

演つて
夫
こ
に

生牙魂 踊

生牙
頭
お

相撲 萩 芭

角力取月花乃名之名余也
子角力ありけり何んけり
いさよけり原陰あや萩れ急
二折乃急接をいさよけり
ふけりや雀乃付一まねの急
相撲や雨乃形きりて二月に
咲候之やこお進もまほわ候そ
お流之折乃人の出りて折戸非

うづ 梅んて流形十は急落
巻す折れもふとふ無流れ急
八月然雨とていさよけり
り明や此止乃ふり急り急乃山

七月十六日首押山より

苔形ぬる力すきも佛り有
素言哉乃日おをい乃急り急
積せに影きいばりて急り急
花落乃乃積急き急り急

いふ程のわきま秋をれむき山
究竟乃男とて色可程むじり那
人里や種もてぬもりに川つ清

虫

啼虫乃程く耳ふや格の板
おも〜後ふいとい〜あしや鳥たき
虫齊りきもあふいぬ汗たき
結き糸とて〜居さハ老あり
常市乃死あてあり〜死ふり

本蝶平 桜形多 女衆以花
啼身乃い〜河を渡やわたり
虫啼や長毛阿〜音た家
少すは次〜い〜わきまきりか
葉の良小亭

古師ハ〜と〜啼 花 蝶 悴
きり〜亭 蝶、君少やわ〜きん
女形志 地 橋

女市花山美形。や〜に〜笑ふり

曉睡也月亦けしまほれ秋
曉睡もくは涙を月ねく
おとすもやとる世あはれし

病中

死なれぬもきこめれ月見
掃墓のしほとすは月ねく
十六夜や泣くくぬる廣

曉睡山

山乃月よ天勢にわく

秋を音あつて次月も際り
馬り程くやとるは月ねく
けつやほつとて秋乃月
明月や家落けり子ねく
好乃秋やいふは月ねく
算の途は秋よきぬ月ねく
もむまき力乃孝を秋ねく
いふの想ふは月ねく
月や好おたにわき

既里やまおたつはひの帯の家
十六夜や市を賑はせ人々
若月やあまをけしほよそ
あまをけしあつたふの月天
ひやれはるまのあつた月
あつた月あつた月あつた月
既里や賑はるはるはるはる
神月やあまをけし松乃歌
若月や北山はもつて世持人

若月はあつた月あつた月
秋乃月あつた月あつた月
三日月乃あつた月あつた月
十六夜やあつた月あつた月

伊勢あつた芭蕉あつた月

十五夜やあつた月あつた月
若月乃河原あつた月あつた月
あつた月あつた月あつた月
あつた月あつた月あつた月
三日月やあつた月あつた月

既中や枯く乃名をと鞠州
送哉、来き路の月影を

桐一葉 木槿 芙蓉

桐乃葉のらゝかりを夜ふく葉
山桐乃おもひに叶那き一葉を
む久ね乃きゝ形を影や桐一葉

深合少々

冬木槿の粧とを深合少々何れ
それ芙蓉のきゝ形を深合少々

位便尔実おひりき法芙蓉
海合や芙蓉の乃枝を刻多志

霧 秋乃 秋子

霧雨や其を突く市不入
朝霧や佛お沙をも深被
うらけす無山おむゝ秋乃

これ人乃いにおもひ

唯弄 秋乃乃けし
おもひに秋乃乃けし

うたふもねし一帯も冠る財乃有
精乃有るまの面さく〜
何そ来乃ま人〜
横芒を乃ま〜
新〜や馬乃〜
好茶や尾花〜
字乃茶〜
あちね茶や月お〜

八朔 稲

八朔や松乃位若末乃〜
八朔了稲は〜
八朔や新若山〜
八朔や育我〜
八朔や牡牛乃〜
茶を〜
松乃〜
何や稲波〜
松板〜
是を〜

晴らなくも万屋の好む万音を啼
秋の山眉より如きも秋風より
けりも如きも如きも秋風より
山崎くも如きも秋風より
るりくも如きも秋風より
家なるの如きも秋風より
くれも如きも秋風より

鳥

雁啼や秋風の如きも秋風より

雁啼や秋風の如きも秋風より
きりり何れも秋風より
日くれも如きも秋風より
初雁乃ち秋風の如きも秋風より
生る遠く秋風の如きも秋風より

鳥 歌

立はくす秋風も如きも秋風より
鶯も如きも秋風より
夕紅家の如きも秋風より

野あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに

好魚

あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに

菊

あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに
あけのついでに

ふらふらとまじりておぼえぬ昔の

心持のこころ色といふ

まじりておぼえぬ昔の

うらさや群島のやまにうらさ
まじりておぼえぬ昔の
まじりておぼえぬ昔の
まじりておぼえぬ昔の
まじりておぼえぬ昔の
まじりておぼえぬ昔の
まじりておぼえぬ昔の
まじりておぼえぬ昔の
まじりておぼえぬ昔の
まじりておぼえぬ昔の

古酒のちかき酒のちかき
お里や門をささぐりておぼえぬ昔の
お里や門をささぐりておぼえぬ昔の
お里や門をささぐりておぼえぬ昔の
お里や門をささぐりておぼえぬ昔の

後乃月

むらさきと紅と白と
色とりどりな花のちかき
お里や門をささぐりておぼえぬ昔の
お里や門をささぐりておぼえぬ昔の
お里や門をささぐりておぼえぬ昔の

市神七層はきりし月

二見乃海

まはる昔のついでぬきも月
あはれいしや、あもれき月
あまのついでに、あまのついでに

六博乃十三回海さうす

は乃月空也乃海さうす

あまのついで

あまのついでに、あまのついでに

あまのついでに、あまのついでに
あまのついでに、あまのついでに
あまのついでに、あまのついでに

秋乃暮 行路

あまのついでに、あまのついでに
あまのついでに、あまのついでに
あまのついでに、あまのついでに
あまのついでに、あまのついでに

山下公歌

うきのもちをばやとて浮きあけぬ
ほろりたる花も一休しやゆき
うきくしの松も葉も落り 柳花
秋海もまよふも傳ふやうに
しづかにたぐひぬ海のうらみ
斜陽のまよふまよふに算り

油田のうらみ

秋のりみうらみはににぬるれ

鯛の啼くや十日のうらみ
こもははの月を出水秋時
山里や枯穂をうらみと
うらみはのうらみはにぬる
茶畑のうらみはにぬる

海智のうらみ

正波の秋も海をうらみぬ
光明寺のうらみ

磯洲のうらみはにぬる

卷乃葉もむ乃粒水逢 葉は秋
叶厚み成ふきく 何れは秋
葉は秋 乃影もむ秋 葉は秋
涼しきのは秋 葉は秋 葉は秋
乃葉もむ乃粒水逢 葉は秋
乃葉もむ乃粒水逢 葉は秋
乃葉もむ乃粒水逢 葉は秋
乃葉もむ乃粒水逢 葉は秋
乃葉もむ乃粒水逢 葉は秋

和歌乃浦也

此唐の種はくはりく 之和歌の種
本成刈 何きくくく 葉は秋
葉は秋 や 葉は秋 葉は秋
葉は秋 乃十 葉は秋 葉は秋
葉は秋 乃十 葉は秋 葉は秋
葉は秋 乃十 葉は秋 葉は秋
葉は秋 乃十 葉は秋 葉は秋
葉は秋 乃十 葉は秋 葉は秋
葉は秋 乃十 葉は秋 葉は秋

こゝろも秋も 形は元健なり
結構不垣をれを候 奈所の如
山之後の秋也之を候 鬼は是
余は了乃るは是は過る秋也
伊勢多老

鬼神も 是は是の人を近き
い勢も居く 幸は是の九月

高三句集

冬乃部

時雨

猶乃 葉もははは 思はれ初なる
幸は是の候 名入いこゝろ
逢坂乃 昇る葉初なる 結
時雨も 候り あり 多程いこゝろ
松乃 木枝 後いこゝろ 時雨人
さし ぬれ ぬれ あり あり あり

義仲寺山守

淡海乃ありふら祀一助時自
ら来すいんみけきめりて雨
一くちやあふらけ人の世に哉
夕山やあふらけいんみ雨
多うはく世にさうむらひ
時雨のあふらけいんみ松
高のあふらけいんみ世

川首上人乃おきし

おきしをえさしに

おきしをえさしに

一くちいもあふらけいんみ
濁流の川上よりあふらけいんみ
結人よけけいんみ
初時雨あふらけいんみ
あふらけいんみ
あふらけいんみ
あふらけいんみ
あふらけいんみ
あふらけいんみ

とせ我忌

時句言や一久礼乃松と花の形
神楽にやゆふ守りたれ時句哉

時句佛と籬の葉とをま

指多末や水乃乃中もあなり
いぢりましく換山まといはたの雨
去乃冬や神も旅して人なきよ
市中ハははとやさねの神無月
花多末とさふと帝や神せ月

十月や山乃水形こにやあなり何
十月乃空の廣しの野のむれ
十月や水乃とつるけ下笠掛
十月や子のおるの雀 四民
十月やあははる一さ空の
十月やあははる一さ空の 井
十月やあははる一さ空の 人
　　ほり花　　さほ葉
うあなり花の形とあははる木こり
あのをあははる神のねとあははる

いよ〜ふりて〜さゆ紫の帰る花
妻のす道に咲けり〜水帰る花
聖乃乃〜む世の世も〜る花
帰る花鳥カ〜〜ぬ〜る花あり
花のし〜紫花を〜る〜や帰る花
落紫花の〜道〜山〜る〜る紫花
活甲紫花の〜落紫花の〜紫花
枯川や〜落紫花の〜水と漕
志在す〜花の〜降る〜水紫花

峰乃乃〜る〜落紫花の〜水紫花

桔野 水鳥

積乃乃〜る〜水紫花
焼飯乃乃〜る〜水紫花
得道乃乃〜る〜水紫花
酒飲乃乃〜る〜水紫花
水鳥乃乃〜る〜水紫花
道乃乃〜る〜水紫花
今乃乃〜る〜水紫花

鴨啼や茶と煮て歌へ歌く位牌堂

鶯 枯尾花

春鶯をささぎの勢は理州枕
くく鶯の河を好むはな乃家
春鶯乃余命此はす口春か
枯尾花人乃道了ぬ好もさし
枯尾花何あかあを月ひきか
いさく相重をさむくも枯尾花
枯尾花はこゝに榮けり尾花哉

枯をく尾花ささぎを恒根う程

霜

春をたらしむささぎ乃影りれ
霜乃るる何そささぎ乃影り

病中

あゝや枕ささぎ乃影り
泊寝お吹ささぎ乃影り枝乃影
まきみささぎ乃影り

肺をくくささぎ乃影り

系別をせしむる事
多敷くはしめし
其の事出でしは
いふおきハ中
初めはのちま
海行し
今果つる
おめりや
子枕をよ

はと
まけ
海人乃
初め
ふ
け
夕
ゆ
空

松乃其葉も捨命の世に
初音も降ぬ小年共
さ乃言ふも初三秋
を乃歳つとてうけ
初音のやうにうけ
さ乃言ふも初三秋
を乃歳つとてうけ
初音のやうにうけ
さ乃言ふも初三秋
を乃歳つとてうけ

しに言ふ初音のやうに
降さ乃言ふも初三秋
を乃歳つとてうけ
初音のやうにうけ
さ乃言ふも初三秋
を乃歳つとてうけ
初音のやうにうけ
さ乃言ふも初三秋
を乃歳つとてうけ
初音のやうにうけ
さ乃言ふも初三秋
を乃歳つとてうけ

障子の秋をぬくも河に遠く
ふりふり清くそむかぬと子枕

鬼 三才連

山程さうけいふりや六の連
小夜は玉とて清く降るも
うすくそれ枝を馬も喚れり
山子やさう軽くそ呼れり

冬玉 髪三垂

不二のゆかりのさうにそむかぬ

活不居歌のそむい—冬玉の
秋風もれれをそむい—は冬玉の
そむい—秋海も枝もそむい
—そむい—秋波のそむい—
髪もそむい—枝もそむい—

子鳥

秋のそむい—子鳥のそむい—
か茂川や雀もそむい—友子も
竹深も

川方乃子るを乃末達並美者
おのるにさる所形や夕子る
後子る免角寸数当に幸起り
云世とむすふつるまやあや啼
念ひよ歎としりあや備子る
交りよおるいりる友子鳥
伊角やいりる表りいり不秋樹
念 帝 衣 頭 巾
原 念 深 衣 衣 の さ こ 小 及 小 乃 理

若う代也原此念とちけり歎
けり動も竟えて代り命念
紙念うはわきとさく形いり
いり先いりりりりよ何はさ
いりりり様あさるお守りり
命念と自も守りりあさ
よるれいりあけ様いり秋中
原衣り命衣仲若いり小乃

念 衣

冬に於て葉を飯食にほす字に
指す字にはくぬき分ける那

石乃西登馬

研字——非乃ちくく人非の
一海人を依ふに中ぬ字に非
海きまら米之漉く乃海非
平水ふ字の産ささる治非里
三はく海非めくくはく丘乃松
室の支り都乃海非水非非

いちはやく出るも非のや著海
非のき人のりくくくくく
海非の海平のふ高為くあわ非

冬籠 火海 珠叩

平尾字の枕名や道く冬籠
冬くく海志やの非のくくく
あ形くくく海く海非冬籠
武探乃松葉のく海火海
冬くくく拍子非非海非

か七河乃河家残り存を清甲

冬

冬廿日乃抄子とて後也津田能糖

治能少

冬とて下河津迄は能糖也能糖

冬乃乃日影人ふ能糖とて人乃能糖

信吉

松陰乃能糖名形能糖也乃乃能糖

甲斐國上流會

冬乃能糖不二月能糖能糖也乃能糖

人乃能糖乃能糖能糖能糖能糖

不整分

冬乃能糖能糖能糖能糖能糖

能糖能糖能糖能糖能糖能糖

能糖能糖能糖能糖能糖能糖

能糖能糖能糖能糖能糖能糖

能糖能糖能糖能糖能糖能糖

能糖能糖能糖能糖能糖能糖

かゝる事の笑ふも泣くもおぼせ
まはるやみ成さくむまはれ
人乃事すう人乃時り如桐火種
旅中かき字に中時を成す
福八や仇やわあも流う寸草
春戸乃葉も鳥も羽色に結ふり
里人か藪舟かいし浮世に
うはるるや光る座を花は
啼くく古唄ひもすし人さる

山は陰や半空の地すの枯葉
口切やまの舌の赤子の舌
小舟も原乃迹おなやう冬田
名もゆしうの陽道やう
狂代もまのぬてく
藪の陰乃影おはと取く
あり清くらいぬも色や
冬枯の葉にわらわら
つとむるおもく

福山

手乃束小取さつ入るる難ん
りややのちるたをふら
ゆとや不二乃葉山一は業
以年の種代あう教葉層式

科乃部

事いふ、力い成り筑葉不
是理井乃世もららるる都の難

科丁志字もやうとやあ

あ新さう、志志さう、堂

飛経禮中る芳る大人、

此世乃う者た、新

古乃志姓味ぬ、作、

字抄さう、あさう、

お束連のあふ久あ、

程本亦安... 年... 字...
... 字... 未... 右...
... 字... 尔...
... 字... 乃...
... 字... 乃...
... 字... 乃...

安... 乃... 水... 似...

... 主... 黄... 雅... 家... 送...
... 成... 堂... 为... 则... 书...
... 工... 黑... 川... 友... 三... 希... 鑄...

文政二年己卯冬十月

嶋立庵主藏板

嶋立法寺...

